後期ヘルダーリンの詩作と悲劇論の研究
――詩的多面性の理解に向けて――

益　敏郎

フリードリヒ・ヘルダーリンの詩作は、詩人の使命や来たるべき理想を問う真剣さ、聖なるものへの敬虔さによって知られる。この敬虔かつ真剣な詩人というイメージは、従来のヘルダーリンをめぐる議論において一貫した前提となってきた。これを「ヘルダーリン受容」というそれ自体特異な歴史現象と見なすべき言説の展開から見ると、時代批判的な力や新しい理想を示す構想力を詩的なものに求める西欧近代に特有の欲求が、その根底に作用して生じた現象だったということが明らかになる。つまりこれは、18 世紀末にヘルダーリンもその一翼を担ったプロジェクトとして掲げられ、これによって近代ドイツが陥っていた政治的、社会的、道徳的危機を一挙に解決することを目指した「新しい神話」「新しい宗教」論に端を発する受容の地平で生じた現象だったのである。従来のヘルダーリン受容史研究は、「ドイツ特有の道」論の図式に則って戦前のヘルダーリン崇拝やナチス時代の政治利用を「スキャンダル」と見なし、戦後の議論との差異化を試みてきた。しかしここには 18 世紀末から 20 世紀を貫く連続性が、それも西欧近代の文化現象における一つの典型を示すものとして存在するのである。

しかしヘルダーリン受容の歴史は、戦前、戦後の境界を超えるだけでなく、およそ考えうる限りの多様な立場――戦前の排他的な愛国主義、マルクス主義や社会主義の左翼陣営、ユダヤ系の宗教哲学、1960、70 年代の政治の季節、80 年代以降に再燃した宗教、神話論、近年の新右翼、フランス現代思想を中心とするポストモダン、統合失調症をめぐる精神病理学など――から受容された、きわめて論争的な歴史でもあった。つまりヘルダーリンの近代批判やユートピア的理想を自らの立場に引き入れようと争われた、言わばアリーナ的言説空間だった

のである。このような受容史を踏まえたとき、問題はこれらのなかからどの立場を取るのか、どの理念、どの神を選択するのかという点にはない。そうではなく、このような多方面からの受容をもたらすヘルダーリンの詩作の多面性そのものを把握することである。ヘルダーリンが崇高な詩的理念への敬虔さ、真剣さに部分的に悖るような形で、自らこれを強力に差異化するような詩作の多面性を追求していたことが理解されてこなかったのである。そしてこうしたヘルダーリンの詩的多面性への試みを最も強く刻印したドキュメントが、受容の最大の焦点となった 1800 年前後から 1806 年の間のいわゆる後期の詩作と悲劇論である。それゆえ後期ヘルダーリンの詩や悲劇へのさまざまな取り組みから、度重なる時代の転換、価値観の変動を超えて読み継がれ、今なお読まれるべきヘルダーリンの詩作が、新たな形で把握されなければならない。（以上序論）

後期ヘルダーリンが詩作に取り組む背景をなすのが、すでに述べた「新しい神話」「新しい宗教」論である。ヘンリッヒの状況配置研究によって、共同的な思考空間におけるヘルダーリンの哲学的寄与が認められるようになったが、この「新しい神話」「新しい宗教」論も、1790 年代のドイツにおける政治、哲学、社会における「三重の危機」の解決が求められるなかで、詩人と思想家たちの複数の共同的な状況配置から生成した言説だった。シラーの美的国家論、ヘーゲルたち初期観念論者の体系プログラム、ヘルダーリンの悲劇的宗教論、初期ロマン派の神話論、シュライアマハーの宗教論などにおいて、詩的なもの、芸術的なものに革命的な変革の力を求めるメシアニズム的要求が共有されつつも、終末論的閉鎖性を開いていくような多彩で多方向的な思考の場が形成されたのである。そしてヘルダーリンはこれを牽引する立場にあった一方で、ここでの理想をさらに複雑化、多面化するような思想をこの時期すでに示していた。ヘルダーリンの後期の展開は、こうした傾向が深化、先鋭化していく展開なのである。（以上序章）

ヘルダーリンによる詩作の多面性構築の理論として解釈できるのが、従来ほとんど評価されてこなかったアフォリズム形式の詩学論文〈七つの格言〉である。ここでヘルダーリンは、シラーに対するコンプレックスの克服と、18 世紀

の啓蒙主義詩学、さらにはロンギノスの崇高論の批判的受容という複数の関心事を巧みに詩学理論へと昇華させ、独自の立場を示している。それは詩的「熱狂」を限界まで高める原理としての「冷静さ」の概念、論理的単一性に抗する詩的「倒置」の論理、そして詩のなかに「過誤」や「詩的でないもの」までをも配置する配剤者としての詩人というイメージにおいて示されている。これによってヘルダーリンは、『ヒュペーリオン』期の「自身のうちで差異化された一者」という調和的理想を、より複雑に多面化しようとするのである。また同時期の手紙には、崇高な詩的理想を濁らせる卑俗な現実から逃げるのではなく、これを受け入れ「詩的迷い」を「詩の生き生きしたもの」へと転換しようとする決意が述べられている。ヘルダーリンの多面性構築に向けられた詩作は、現実を受け入れようとする柔軟な態度とも通じていたのである。（以上第 I 章）

ヘルダーリンは比較的小規模なオーデやエピグラムを創作するなかで、さまざまな詩的形式を、そこで表現される詩作の内実や詩人モティーフと連動させて「冷静に」使い分ける実験的試みを行っていた。そして後期ヘルダーリンの代表作『パンとぶどう酒』は、ここで試みられたさまざまなモティーフが倒置の論理で冷静に配置されており、〈七つの格言〉の理論の実践という観点から解釈すべき作品となっている。とりわけここでの詩人、詩作モティーフに着目すると、夕べの詩人、夜の熱狂的詩人、予言者詩人、乏しき時代の詩人といったさまざまなモティーフが複雑に配置されている。これは、「生は独り担われたのではなかった」という格言調の詩句で言われるような、それぞれの不完全性が相互補完において「生」を支えるような多面性、混交性が実現された詩作なのである。ヘルダーリンはしばしば「詩人の詩人」（ハイデガー）として、詩作の本質を反省的に打ち建てる詩人だと言われてきた。しかし反省される詩作は決して単一の理念に回収しえず、多様に自己反省されるなかで複数化され、詩の多面性を構築する。ヘルダーリンは詩作を複数的に詩作する言わばさまざまな詩人の詩人なのであり、このことは並外れて多様な解釈可能性へ開かれた彼の詩作の根拠にもなっているのである。（以上第 II 章）

1800 年前後から 1806 年にわたる後期のなかでも、1802 年のボルドー滞在を

境に、ヘルダーリンの詩作にある種の変化が生まれてくる。それが「冷静さ」の深化というモメントである。ヘルダーリンの「冷静さ」には、多面的構成の原理という詩学的な意義が与えられていたが、1802 年前後から経済状況、社会的孤立状況、そして精神的病の症状が深刻化するにつれて、「冷静さ」がこれを引き留める確実さへの要求と結びついてさらに重要性を増していくのである。「冷静さ」の概念的深化を示す最重要のドキュメントが、ベーレンドルフ宛書簡である。ここでヘルダーリンは〈七つの格言〉以来の熱狂と冷静の関係を再び取り上げ、これを古代と近代、異質と固有の力学的関係のなかに置くことで、「西洋的、ユーノー的な冷静さ」という新たな概念を生み出している。〈七つの格言〉において作品に生き生きとした多様性をもたらすとされた「冷静さ」は、ここで近代芸術の固有性に位置づけられ、神々の去った時代、神々との直接的な関係を失った時代状況を示す意味にまで拡張され、また「ユーノー的」という概念に含まれる地上的なものという意味において、現実的な経験を受け入れる柔軟さ、精神的動揺や空虚な熱狂を抑え安定をもたらす「確実さ」、そして芸術や詩の持続的な「しるし」としてのあり方をも包含することになった。これは、詩作への具体的な反映としては、碑文のような明確さと峻厳さを持つ文体、そして地上的な経験に向けた簡潔で緻密な叙述という形で現れることになる。これらを踏まえると、「アポロンが僕を撃った」という有名な言葉によって専ら熱狂的な体験として理解されてきたフランスでの体験は、異質なものを学んだ「冷静さ」の体験としても理解される必要がある。

1802 年以降はこうした新たな「冷静さ」が作品内にも浸透している。これはヘルダーリンの詩から「祖国的」な傾向、すなわち未来志向の理想主義、ユートピア主義が相対的に後景へ退いていくことを意味している。「神聖に冷たき」という形で「冷静さ」の概念が登場する『生の半ば』では、陶酔に均衡をもたらす覚醒としての冷静さとともに、「冷め切った」現実における詩的な危機を、巧みに詩的構成へともたらす「冷静さ」が発揮されている。従来の見解では『生の半ば』を理想と現実の局面に分断し、前者にのみ詩的理想を読み取るような解釈がなされてきたが、「冷静さ」がこの作品を全体として理解する視座を与えるので

ある。「キリスト讃歌」の一つ『唯一者』（第 1 稿）でも、キリストと関連づけられた詩人の使命について、従来は未来的理想を示す意義や神と人間をつなぐ媒介者としての側面が強調されてきたが、異郷への旅、自己反省的語り、現世的詩人のモティーフを通じて、地上に留まり、間接性や有限性において世界を保とうとする「冷静さ」への志向が表現されている。また『唯一者』の第 2、3 稿および『追想』、未完の断片においても地上性、間接性のモティーフが追求され、とりわけ「分けられたものは／良い」という言葉に表れるような、調和なき地上に留まることの肯定性という思想が現れる。これは詩的多面性が一つの世界観にまで高められた思想だと理解することができる。またこうした「冷静さ」は、ヘルダーリンを脅かしていた狂気すら作品に取り込もうとした彼の詩作への態度を示唆するものでもあり、ベートーヴェンなどに比せられるヘルダーリン的「晩年様式」の根幹となっている。（以上第 III 章）

ヘルダーリンにとって悲劇は、さまざまな詩的形式のなかで最も厳格な形式を持つものであり、詩作のためにその形式を学びかつ応用すべき模範だった。それゆえ後期ヘルダーリンにおいて悲劇への取り組みは、詩作に匹敵する重要性を持っていた。ヘルダーリンは詩学理論的、宗教的、歴史哲学的関心において悲劇論に取り組んだが、その結節点にある重要概念が、『ソフォクレス悲劇』の注解に初めて登場する中間休止の概念である。ヘルダーリンはこの中間休止の概念を、アリストテレス詩学の独特な受容から編み出している。アリストテレスのカタルシス論を宗教化し、韻律上の句切りを示すにすぎなかった中間休止に、神と人間の空虚な対立という意味を与えたのである。ここには、『ヒュペーリオン』期の特徴を多く受け継いだエンペドクレス悲劇のプロジェクトからの、大きな変化が見て取られる。以前の融和的自然、円環的歴史観、聖なる英雄という諸々のイメージが、敵対的な自然、怒涛のように突き進む悲劇的な時間推移、冒涜的英雄のイメージへと転換し、中間休止において示される神と人間の関係は、オイディプスにおいて神の不実という分断、アンティゴネにおいてギリシャ的な神的近接から西洋的な神的遠離への移行によって特徴づけられるのである。さらにここで示されるオイディプスとアンティゴネの形象は、後期詩におけるキリ

スト像の変容とも関わっており、悲劇論と詩作の強い関連性を示している。ヘルダーリンの悲劇論は、全一的な完成を目的とする理想主義を相対化し、より多様な要素を複雑に配置しようとする後期詩の傾向を、詩の場合よりも明確な対立構造において根拠づけるものとなっているのである。（以上第 IV 章）

ヘルダーリンの悲劇への取り組みにおいては、翻訳もまた重要な位置を占めている。ヘルダーリンの翻訳は、ギリシャ語に対する忠実さにおいてドイツ語を異化しその可能性を拡張したものとして、20 世紀の先鋭的な翻訳思想から高い評価を受けているが、一方で彼は翻訳を通じてソフォクレス悲劇の「欠陥」を改善し、近代に適応するものとして再創造しようという驚くべき企図を持っていた。とりわけ注目されるのが、オイディプスとアンティゴネを、古代悲劇とは異なる原理において、明確に有罪的な英雄へと仕立てあげるヘルダーリンの処置である。彼は独自の悲劇理解に基づいて原典に重大な変更を加え、オイディプスを真理の直接的な知を求める性格へと、またアンティゴネを神との過剰な親密さにおいて冒涜的な言葉を発する性格へと変容する。解決不可能なジレンマに陥って破滅することに英雄の悲劇性を求めるのが通常のところを、ヘルダーリンは英雄を明確に有罪だと見なし、神への冒涜を犯す形象とするのである。

こうした有罪的英雄のモティーフは、後期ヘルダーリンの詩作だけでなく、彼の自己意識とも関連性を持つ問題だった。つまりヘルダーリンは詩的熱狂を有罪性と関係づけ、詩的理想に強い否定性を介在させようと試みるなかで、詩人としての自己意識において崇高な使命の自覚だけでなく、自らの有罪性への嫌疑を抱いていたと考えられるのである。これは多面性を追求するヘルダーリンの試みの一端を示すものである。ヘルダーリンは、自らの詩を神や祖国への捧げ物にしようとする敬虔さ、詩作の不可能性への認識、詩人の意義についての自己懐疑、またボルドー滞在以降に現れる神と分断されたあり方そのものを肯定する思想など、多様な詩作のあり方を追求していた。そして神に対する過剰な知、あるいは神聖かつ冒涜的な語りという有罪的英雄のモティーフは、ヘルダーリンの一つに収束することのないさまざまな詩作への試みのなかで、彼の詩人としての自己意識と関わる形で追求されていたのである。（以上第 V 章）